

小春の狐

泉鏡花作

—

朝 ー ー 此の湖の名ぶつと聞く、蜷の汁

で。・・・爛をさせるのも面倒だから、バスケットの中へ持参のウイスキーを一口。蜷汁にウイスキーでは、些と取合せが妙だが、それも旅らしい。

いゝ天気で、暖かかったけれども、北國の事だから、厚い外套にくるまつて、そして温泉宿を出た。

戸外の廣場の一廓、總湯の前には、火の見る階子が、高く初冬の空を抽いて、そこに、うら枯れつゝも、大樹の柳の、しつとりと静に枝垂れたのは、
「火事なんかありません。」と言ひさうである。

横路地から、すぐに見渡さるゝ、汀の蘆の中に舳が見え、艫が隠れて、葉越葉末に、船頭の形が穂を戦がして、「其の船の胴に動いて居る、が、あの鐵鎚の音を聞け。印半纏の威勢のいゝのでなく、田

船を漕ぐお百姓らしい、もつさりとした布子のなり
だけれども、船大工かも知れない、カーン／＼と打
つ鎚が、一面の湖の北の天なる、雪の山の頂に響い
て、その間々に、

「これは三保の松原に、伯良と申す漁夫にて候。

萬里の好山に雲忽ちに起り、一樓の明月に雨始めて
晴れたり・・・」

と謡ふのが、遠いが手に取るやうに聞えた。――

船大工が謡を唄ふ――一寸餘所にはない氣色
だ・・・剩へ、地震の都から、とぼんとして
落ちて来たものゝ目には、まるで別なる乾坤である。

脊の伸びたのが枯交り、疎に成つて、蘆が續

く・・・傍の木納屋、苦屋の袖には、しをらし
く嫁菜の花が咲残る。・・・あの戸口には、羽
衣を奪はれた素裸の天女が、手鍋を提げて、其の男
のために苦勞しさうにさへ思はれた。

「これなる松にうつくしき衣掛れり、寄りて見れ
ば色香妙にして・・・」

と謡つて居る。木納屋の傍は菜畑で、眞中に朱を輝かした柿の樹がのどかに立つ。枝に渡して、ほした大根のかけ紐に青貝ほどの小朝顔が縋つて咲いて、つるの下に朝霜の焚火の残つたやうな鶏頭が幽に燃えて居る。其の陽だまりは、山靈に心あつて、一封のもみぢの音信を投げた、玉章のやうに見えた。里はもみぢにまだ早い。

露地が、遠目鏡を覗く状に扇形に展けて視められる。湖と、船大工と、幻の天女と描ける玉章を掻亂すやうで、近く歩を入るゝには惜いほどだったから

私は――

（これは城崎關彌と言ふ、筆者の友だちが話したのである。）

――道をかへて、たとへば、宿の座敷から湖の向うにほんのりと、薄い霧に包まれた、白砂の小松山の方に向つたのである。

小店の障子に貼紙して、

(今日より昆布まきあり候。)

「……のんびりとしたものだ。口上が嬉しかったが、これから漫歩と言ふのに、こぶ巻は困る。張出しの駄菓子に並んで、箆に柿が並べてある。これなら袂にも入らう。」
「あり候」
に挨拶の心得で、

「おかみさん、此の柿は……」

天井裏の蕃椒は眞赤だが、薄暗い納戸から、いぼ尻まきの顔を出して、

「其の柿かね。へい、食べられましない。」

「はあ？」

「まだ澁が抜けねえだでね。」

「はあ、ではいつ頃食べられます。」

きく奴も、聞く奴だが、

「早うて、……来月の今頃だあねえ。」

「成程。」

まつたく山家はのん気だ。つい目と鼻のさきには、化粧煉瓦で、露臺と言ふのが建つて居る。別館、或は新築と稱して、湯宿一軒に西洋づくりの一部は、

なくては成らないやうにして居る盛場でありながら。

「お邪魔をしました。」

「よう、おいで。」

また、をかした事がある。……くどいと不可い。道具だてはしないが、硝子戸を引きめぐらした、いゝかげんハイカラな雑貨店が、細道にかゝる取着の角にあつた。私は靴だ。宿の貸下駄で出て来たが、あを桐の二本歯で緒が弛んで、がたくり、がたくりと歩行きにくい。此店で草履を見着けたから入つたが、小兒のうち覺えた、こんな店で賣つて居る竹の皮、藁の草履などは一足もない。極く雑なのでも裏つきで、鼻緒が流行のいちまつと洒落れて居る。いや何うも……。柿の澁は一月半おくれても、草履は駄足で時流に追着く。

「これを貰ひますよ。」

店には、丁度適齡前の次男坊と言つた若いのが、もこ／＼の羽織を着て、のつそりと立つて居た。

「貰つて穿きますよ。」

と斷つて……。早速ながら穿替へた、――

誰も、背負つて行く奴もないものだが、手一つ出
すでもなし、口を利くでもなし、唯にや／＼と笑つ
て見て居るから、勢ひ念を入れなければならなかつ
たので。・・・

「お幾干。」

「分りませんなあ。」

「誰かに聞いてくれませんか。」

若いのは、依然としてにや／＼で、

「誰も今居らんのですね・・・」

「ぢやあ歸途に上げませう。ぢき其處の宿に泊つ

たものです。」

「へい、大きにー」

まつたく何うものんびりとしたものだ。私は何か
の道中記の挿繪に、土手の薄に野苨の實がこぼれた
中に、折敷に栗を鹽尻に積んで三つばかり。細竹に
筒をさして、四もと、四つ、錢の形を描き入れて、
傍に草鞋まで並べた、山路の景色を思出した。

「此の葦は何と言ひます。」

山沿の根笹に小流が走る。一方は、日當の背戸を
 横手に取つて、次第疎に藁屋がある、中に半農――
 此の潟に漁つて活計とするものは、三百人を越す
 と聞くから、或は半漁師――少しばかり商もす
 る――藁屋草履は、ふかし芋と此の店に並べて
 あつた――村はづれの軒を道へ出て、そゝけ髪
 で、紺の筒袖を上被にした古女房が立つて、小さな
 箆に、眞黄色な葦を装つたのを、恚う覗いて居る。
 と箆を手にして、服装は見すばらしく、顔も竄れ、
 髪は銀杏返が亂れて居るが、毛の艶は濡れたやうな、
 姿のやさしい、色の白い二十あまりの女がイむ。
 葦は軸を上にして、うつむけに、ちよぼ／＼と並
 べてあつた。

實は――前年一度この温泉に宿つた時、矢張
 り朝のうち、……其の時は町の方を歩行いて、
 通りの煮染屋の戸口に、手拭を頸に菅笠を被つ

た・・・・此のあたり濱から出る女の魚賣が、天秤を下した處に行きかゝつて、鮮しい雑魚に添へて、つまと云つた形で、おなじ此の葦を笊に装つたのを見た事があつたのである。

銀杏の葉ばかりの鰈が、黒い尾でびち／＼と跳ねる。車蝦の小蝦は、飴色に重つて萌葱の脚をびんと跳ねる。魴の鰭は虹を刻み、飯鮓の紫は五つばかり、斷れた雲のやうにふら／＼する・・・・こち、めばる、青、鼠、樺色の其の小魚の色に照映えて、黄なる葦は美しかった。

山國に育つたから、學問の上の知識はないが――葦の名の十やら十五は知つて居る。が、それはまだ見た事がなかつた。・・・それに、私が妙に葦が好きである。・・・覗込んで何と言ひますかと聞くと「霜こしや。」と言つた。「は、あ、霜こし。」――十一月初旬で――松葦はもとより、しめぢの類にも時節は些と寒過ぎる。・・・そこへ出盛る葦らしいから、霜を越すと言ふ意味か、それとも此の葦が生えると霜が降

る……霜を起すと言ふのかと、其の時、考ふる隙もあらせず、「旦那さん何うですね。」とその魚賣が箆をひよいと突きつけると、煮染屋の女房が、づんぐり横肥りに肥つた癖に、口の軽い到輕もので、「買うて遣らさい。旦那さん、酒の肴に……は……、そりやおいしい、猪の味や。」と大口を開けて笑つた。――紳士淑女の方々に高い聲では申兼ねるが、猪は此のあたりの方言で、……お察しに任せたい。

唄で覺えた。

薬師山から湯宿を見れば、しゝが髪結て身を

やつす。

否……と言つたばかりで、外に見當は付かない。……私は其の時は前夜着いた電車の停車場の方へ遁足に急いだつげが――笑ふものは笑へ。――そよぐ風よりも、湖の蒼い水が、蘆の葉ごしにすら／＼と渡つて、おろした荷の、その小魚にも、葦にも颯とかゝる、霜こしの黄茸の風情が忘れられない。皆とは言はぬが、再び此の温泉に遊んだのも、半ば此の葦に興じたのであつた。

「――ほゞ心得た名だけれど、したいものに近づくとて、あらためて、いま聞いたのである。」

「此の輩は何と言ひます。」

「何が何でも、一方は人の内室である、他は淑女たるに間違ひない。――其の眞中へ顔を入れたのは、考へると無作法千萬で、都會だと、これ交番で叱られる。」

「霜こしやがね。」

「と買手の古女房が言つた。」「綺麗だね。」

「と思はず言つた。近優りする若い女の容色に打たれて、私は知らず目を外した。」

「此方は、」

「と、片隅に三つばかり。此の方は笠を上にした茶褐色で、霜こしの黄なるに對して、女郎花の根にこぼれた、茨の枯葉のやうなのを、――爰に二人たつた渠等女たちに、フト思較べながら指すと、

「かつば。」

「と語音の調子もある……口から吹飛すやうに、ぶつきらばうに古女房が答へた。」

「あゝ、かつば。」

「ほゝゝ。」

かつばとかつばが顔合せをしたから、若い女は、うすよごれたが姉さんかぶり、茶摘、桑摘む繪の風情の、手拭の口に笑をこぼして、

「あの、川に居ります可恐いではありませんの、雨の降る時にな、これから着ますな、あの色に似て居りますから。」

「そんで幾干やな。」

古女房は委細構はず、箆の縁に指を掛けた。

「然うですな、此でな、十銭下さいまし。」

「どえらい事や。」

と、しよぼ／＼した目を二つた、睨むやうに顔を視めながら、

「高いがな／＼。三銭や、えつと氣張つて。……三銭が相當や。」

「まあ、」

「三銭にさつせえよ。――お前もな、青草ものゝ商賣や。お客から祝儀とか貰ふやうには行かんぞな。」

「でも、」

と葦が映す影はないのに、女の臉はほんのりする。安値いものだ。……私は、その言ひ値に買はうと思つて、聲を掛けようとしたが、隙がない。

女が手を離すのと、箆を引手繰るのと一所で、古女房はすた／＼と土間へ入つて行く。

私は腕組をして其處を離れた。

以前、私たちが、草鞋に手鎌、腰兵糧と言ふもの／＼しい結束で、朝くらいうちから出掛けて、山々谷々を狩つても、見た數ほどの葦を狩り得た驗は餘りない。

たつた三錢—— 氣の毒らしい。

「御免なして。」

と背後から、聲音を立てず靜に來て、早や一方は窪地の蘆の、片路の山の根を摺違ひ、慎ましやかに前へ通る、すり切草履に踵の霜。

「あゝ、姉さん。」

私はうつとりと聲を掛けた。

「――旦那さん、その蟲は構うた事には叶ひ
ませんわ。――煩うてな……」

もの言もやゝ打解けて、おくれ毛を撫でながら、
「ほつといてお通りなさいますと、ひとりでに離
れます。」

「随分居るね、……此は何と言ふ蟲なんだ
ね。」

「東京には居りませんの。」
「いや、雨上りの日當りには、鉢前などに出はす
るがね。こんなに居やしないやうだ。よくも氣をつ
けはしないけれど、……（しやう／＼）よ
り最と小さくつて煙のやうだね。……また此
處にも一團に成つて居る。何と言ふ蟲だらう。」
「太郎蟲と言ひますか、米搗蟲と言ふんですか、
どつちかでございますせう。小さな兒が、此の蟲を見
ますとな、旦那さん……」
と、言が途絶えた。

「小さな兒が、此の蟲を見ると？……」

「あの……」

「何うするんです。」

「唄をうたうて囃しますの。」

「何と言つて……其の唄は？」

「極が悪うございますわ。……（太郎は

米搗き、次郎は夕な、夕な。……薄暮合に

は、よけい澤山飛びますの。」

……思出した。故郷の町は寂しく、時雨の晴
間に、私たちも矢張り唄つた。

「仲よくしませう、さからはないで。」

私はちよつかいを出すやうに、面を拂ひ、耳を拂
ひ、頭を拂ひ、袖を拂つた。茶番の最明寺どのゝや
うな形を、更めて靜に歩行いた。――眞一文字
の日あたりで、暖かさ過ぎるので、脱いだ外套は、
其の女が持つてくれた。――歩行きながら、
「……私は蟲と同じ名だから。」

しかし、此は、蟲にくらべて謙遜した意味ではな
い。實は太郎を、浦島の子に擬へて、潜在思ひ上つ

た沙汰なのであつた。

湖を逢に、一廓、彩色した龍の鱗の如き、湯宿々々の、壁、柱、甍を中に隔て、いまは鐵鎚の音、謠の聲も聞えないが、出崎の洲の端に、ぼつゝりと、烏帽子の轉がつた形に成つて、あの船も、船大工も見える。木納屋の苫屋は、さながらその素抱の袖である。

「今しがた、此の女が、細道をすれ違つた時、葦に敷いた葉を残した筈を片手に、行く姿に、ふとその手鍋提げた下界の天女の倂を認めたのである。そゞろに聲掛けて、「あの、茸を、……三錢に賣つたのか。」とはじめ聞いた。えんぶだごんの價値でも説く事か、天女に對して、三錢也を口にする。……さもしいやうだが、對手が私だから仕方がない。「え、」と言ふのに押被せて、「馬鹿々々しく安いではないか。」と義憤を起すと、せめて言ひねの半分には買つて貰ひたかつのだけれど、「旦那さんが見てゝあつたしな。……」と何か、私に對して、値の押問

答をするのが極が悪くもあつたらしい口振で。・
・ ・ 「失禮だが、世帯の足に成りますか。」
ときくと、そのつもりではあつたけれど、まるで足
りない。煩つて居なざる母さんの本復を祈つて願掛
ける、 「お稻荷様のお賽錢に。」 と、少しあ
れたが、しなやかな白い指を、縞目の崩れた晝夜帯
へ挟んだのに、さみしい財布がうこん色に、撥袋と
も見えず挟つて、腰帯ばかりが紅であつた。 「姉
さんの言ひ値ほどは、お手間を上げます。あの松原
は松露があると、宿で聞いて、 ・ ・ ・ ・ 客がたて
込む、女中は忙しいし、 ・ ・ ・ ・ 一人で出て来た
が覺束ない。次手に、いまの（霜こし）のあり
さうな處へ案内して、一つでも二つでも取らして下
さい、 ・ ・ ・ ・ 私は茸狩が大好き。ー」と
言つて、言ふうちに我ながら思入つて、感激した。
はかない戀の思出がある。

もう疾に、餘所の歴きとした奥方だが、その私よ
り年上の娘さんの頃、秋の山遊びをかねた茸狩に連
立つた。男、女たちも大勢だつた。茸狩に綺羅は要

らないが、山深く分入るのではない。重箱を持參で
莫座に毛氈を敷くのだから、いづれも身ぎれいに装
つた。中に、襟垢のついた見すばらしい、母のない
兒の手を、娘さん――そのひとは、厭はしげも
なく、親しく曳いて坂を上つたのである。衣の香に
包まれて、藤紫の雲の裡に、何も見えぬ。冷いが、
時めくばかり、優しさが頬に觸れる袖の上に、月影
のやうな青地の帯の輝くを見つゝ、心も空に山路
を辿つた。やがて皆、谷々、峰々に散つて葦を求め
た。かよわい其の人の、一人、毛氈に端坐して、城
の見ゆる町を遙に、開いた丘に、少しのぼせて、羽
織を脱いで、蒔繪の重に片袖を掛けて、ほつと憩ら
つたのを見て、少年は谷に下りた。が、何を秘さう。
その人のいま居る背後に、一本の松は、我がなき母
の塚であつた。

向つた丘に、もみぢの中に、晝の月、虚空に澄ん
で、月天の御堂があつた。――幼い私は、人界
の茸を忘れて、草がくれに、偏に世にも美しい人の
姿を仰いで居た。

辨當べんたうに集あつまつた。吸筒すびとうの酒さけも開ひらかれた。「關せきちや
ん——關せきちやん——」私わたしの名なを、——
誰たれも呼よぶものゝないのに、その人ひとが優やさしく呼よんだ。
刺さすよと知しりつゝも、引ひつかんで聲こゑを堪こらへた、茨いばの
枝えだに胸むねのうづくばかりなのを尚なほ忍しのんだ——こ
れをほかにしては、最もうきこえまい……母まの
呼よぶと思おもふ、なつかしい聲こゑを、いま一度ど、もう一度ど、
くりかへして聞ききたかつたからであつた。「打うつ棄ち
つて置おけ、もう、食くひに出でて來くる。」私わたしは傍そばの男をとこ
たちの、しか言いふのさへ聞きこえる近ちかまにかくれたので
ある。草くさを噛かんだ。草くさには露つゆ、目めには涙なみだ、縋すがる土つちに
もしと／＼と、もみぢを映うつす絲いとのやうな紅くれなゐの清しみづ水づが
流ながれた。「關せきちやん——關せきちやんや——」
澄すみ透とほつた空そらもやゝ翳かげる。……もの案あんじに
聲こゑも曇くもるよ、と思おもふと、その人ひとは、たけだちよく、
高かつしやう尚しやうに、すらりと立たつた。——此この時とき、日じつ月げつを
外ほかにして、其その丘をかに、氣けだ高かく立たつたのは、其その人ひと唯たゞ一人ひとり
であつた。草くさに縋すがつて泣ないた蟲むしが、いまは堪たまらず蟋こほ
蟀るぎのやうに飛とび出すと、する／＼と絹きぬの音おと、颯さつと留とめ南な
奇きの香かで、もの靜しづかなる人ひとなれば、せき心こゝろにも亂みだれず
に、衝つと白しろ足たび袋びで氈かもを、辻すべつて肩かたを抱だいて、「ま

あ、可^よかつた、怪^け我^がをなさりはしないかと姉^{ねえ}さんは心配^{しんぱい}しました。」「少年^{せうねん}はあつい涙^{なみだ}を知^しつた。

やがて、世^よの状^{さま}とて、絶^たえて其^その人の^{ひと} 倂^{おもかげ}を見る^み事^{こと}の出来^{でき}ずなつてから、心^{こころ}も魂^{たましひ}もたゞ憧憬^{あこがれ}に、家^{いへ}さへ、町^{まち}さへ、霧^{きり}の中^{なか}を、夢^{ゆめ}のやうに彷徨^{さまよ}つた。――

故郷^{ふるさと}の大^{おほ}通^{とほ}りの辻^{つじ}に、老鋪^{しにせ}の書店^{しよてん}の軒^{のき}に、土地^{とち}の新^{しん}聞^{ぶん}を、日毎^{ひごと}に額面^{がくめん}に挿^{はさ}んで描^かげた。表三^{おもてさん}の面上^{めんじやう}段^{たん}に、繪^{えい}入^{いり}の續^{つづ}きものゝあるのを、ぼんやりとイ^たゞ見^みると、さきの運^{はこ}びは分^{わか}らないが、丁^{ちやう}ど思^{おも}合^ひつた若^{わか}い男^{だん}女^{ぢよ}が、山^{やま}に茸狩^{たけがり}をする場^{ばめん}面^{めん}である。私^{わたし}は一目^め見^みて顔^{かほ}がほてり、胸^{むね}が躍^{をど}つた。――題^{だい}も忘^{わす}れた、いまは臆^{おぼろ}氣^げであるから何^{なに}も言^いふまい。……その戀^{こひ}人^{ひと}同^{どう}土^との、人目^{ひとめ}のあるため、左^さ右^うの谷^{たに}へ、わかれ／＼に狩^{かり}入^いつたのが、ものゝ隔^{へだ}てられ、巖^{いは}に遮^{さへ}られ、樹^きに包^つまれ兇^{くせ}漢^{もの}に襲^{おそ}はれ、獸^{けもの}に脅^{おび}かされ、魔^まに誘^{さそ}はれなどして、日^ひは暗^{くら}し、……次第^{しだい}に路^{みち}を隔^{へだ}てつゝ、恚^かくて兩^{りやう}方^{ほう}でいのちの限^{かぎ}り名^なを呼^よび合^あふのである。一句^く、一句^く、會^{くわ}話^わに、聲^{こゑ}に――がある

がある……！が重^{かた}なる。――私^{わたし}は夜^よも寝^ねられないまで、翌^{よく}日^{じつ}の日^ひを待^まちあぐみ、日毎^{ひごと}に其^そ

の新聞の前に立つて読み耽つた。が、三日、五日、六日、七日に成つても、まだその二人は谷と谷を隔てゝ居る。！ も、――も、もゝ、邪魔なやうで焦つたい。が、しかしその一つ一つが、峨々たる巖、森とした樹立に見えた。、さへ深く刻んだ谷に見えた。・・・・赤新聞と言ふのは唯今でも何處かにある。・・・土地の、その新聞は紙が青かつた。それが澄渡つた秋深き空のやうで、文字は一づゝもみぢであつた。作中の娘は、わが戀人で、そして、とぼんと立つて讀むものは小さな茸のやうに思はれた。――石に成つた戀がある。少年は茸に成つた。「關彌。」あゝ、勿體ない。・・・餘りの様子を、案じ案じ捜しに出た父に、どんと背中を敲かれて、ハツと思つた私は、新聞の中から、天狗の翼をこぼれたやうにぼかんと落ちて、世に返つて、往來の人を見、車を見、且つ屋根越に遠く我が家の町を見た。――

なつかしき茸狩よ。

二十年あまり、恁くてその後、茸狩らしい眞似をさへする機會がなかつたのであつた。

「……おとしますわ。でも、大勢で取り
ますから、茸があればいゝんですけど……」
湯の町の女は、先に立つて導いた。……
湖のながれに道を廻ると、松山へ続く賑らしいの
は、ほか／＼と土が白い。草のもみぢを、嫁菜のお
くれ咲が彩つて、枯蘆に陽が透通る。……そ
の中を、飛交ふのは、琅のやうな蠡であつた。

一つ、別に、此の隙を挟んで、大なる瀉が湧いた
やうに、苺田を沈め、鳩を浮かせたのは一昨日の夜
の暴風雨の餘残と聞いた。蘆の穂に、橋がかゝると
渡つたのは、横に流るゝ川筋を、一つらに渺々と汐
が満ちたのである。水は光る。

橋の袂にも、蘆の上にも、隨所に、米つき蟲は陽
炎の如くに舞つて、むら／＼むらと下へ巻き下つて
は、トンと上つて、むら／＼と又舞ひさがる。

一筋の道は、湖の只中を霞の渡るやうに思はれた。

汽車に乗つて、がた／＼来て、一泊幾干の浦島に
取つて見よ、此の姫君さへ借越である。

「眞個ほんとうに太郎たらうと言いひます、太郎たらうですよ。――

姉ねえさんの名なは？」

「姉ねえさんの名なは？」

女をんなは幾度いくども口籠くちごもりながら、手拭てぬぐひの端はしを俯目ふしめにくは

へて、

「浪路なみぢ。」

と言いつた。

――と言いふのである。 讀者諸君みよなさん、女をんなの名なは浪路なみぢださうです。

四

あれに、翁が一人見える。

白砂の小山の畦道に、菜畑の菜よりも暖かさうな、おのが影法師を、われと慰むやうに、太い杖に片手づきしては、腰を休め、近づいたのを、見ると、大黒頭巾に似た、饅頭形の黄なる帽子を頂き、袖なしの羽織を、ほかりと着込んで、腰に毛巾着を覗かせた。片手に網のついた畚を下げ、じん／＼端折の古足袋に、藁草履を穿いて居る。

「少々、ものを伺ひます。」
ゆるい、はけ水の小流の、一段ちよろ／＼と落口を差覗いて、その翁の、又一息憩らうた杖に寄つて、私は言つた。

翁は、頭なりに黄帽子を仰向け、髯のない圓顔の鼻の皺深く、すぐにむぐ／＼と、日向に白い唇を動かして、

「此の、私がいま来た、此の縦筋を真直ぐに、

づい／＼と行かつしやると、松原まつばらについて畑はたけを横よこに
曲まがる處ところがあるでの。．．．其それを何處どこまでも行いか
せると、沼ぬまがあつての。その、すぼんだ處ところに、土橋どはし
が一つ架かつて居ゐるわい。ー それ／＼、此この見けん
當たうぢや。ー

と、引立ひきたてるやうに、片手かたてで杖つゑを上げ、釣竿つりざをを
撓ためるが如ごとく松まつの梢しすゑをさした。

「ぢやがの。」

と頭かぶりを緩ゆるく横よこに掉ふつて、

「それをば渡わたつては成なりませぬぞ。 (と強つよく言い
つて) ．．．渡わたらずと、橋はしの詰つめをの、些ちと後あとへ
戻もどるやうなれど、左ひだりへ取とつて、小高こたかい處ところを上あがらつし
やれ。其處そこが尋たづねる實盛塚さねもりづかぢやわいやい。」

と杖つゑを直なほす。

安宅あたかの關せきの古蹟こせきとともに、實盛塚さねもりづかは名所めいしよと聞き
く。．．．が、私わたしは今いまそれをたづねるのではな
かつた。道みちすがら、既すでに路傍みちばたの松山まつやまを二處ふたところばかり探さが
したが、浪路なみぢがいぢらしいほど氣きを揉もむばかりで、
茸きのこも松露しじゆろも、似にた形かたちさへなかつたので、獲えものを人ひと
に問とふもをかしいが、且かつは所在しよざいなさに、連つれをさし置お

いて、いきなり聲を掛けたのであつたが。

「いゝえ、實盛塚へは――行かうか何うしよ
うかと思つて居るので、……實はおたづね申
しましたのは。」

「ほん、ほん、それでは、此ぢやらうの。」
と片手の畚を動かすと、ひた／＼と音がして、ひ
らりと腹を翻した魚の金色の鱗が光つた。

「見事な鯉ですね。」
「いや／＼、此は鮒ぢやわい。さて鮒ぢやが
の……姉さんと連立たつせえた、こなたの様
子で見ればや。」
と鼻の下を伸して、にやりとした。

思はず、其の言に連れて振返ると、つれの浪路は、
尾花で姿を隠すやうに、私の外套で顔を横に蔽ひな
がら、髪をうつつむけに成つて居た。湖の小波が誘ふ
やうに、雪なす足の指の、ぶる／＼と震へるのが見
えて、肩も袖も、其の尾花に靡く。……手に
つまさぐるのは、眞紅の茨の實で、その連る紅玉が、

手首に珊瑚の珠數に見えた。

「ほん、ほん。こなたは、これ。　（や、爺
い・・・其の鮒をば俺に譲れ。）　と、姉さん
と二人して、潟に放いて、放生會をさつしやりたさ
うな人相ぢやがいの、ほん、ほん。おはゝ。」
と笑ひながら、ちよろ／＼灌に、畚をぼちやんと
つけると、背を黒く鮒が躍つて、水音とともに鮒が
鳴つた。

「憂慮をさつしやるな。割いて爺の口に啖はうで
はない。　ー　此は稻荷殿へお供物に獻ずるぢや。
お目に掛けましての上は、水に放すわいやい。」
と寄せた杖が肩を抽いて、背を圓く流を覗いた。

「此の魚は強いぞ。　・・・心配をさつしやる
な。」

「お爺さん、失禮ですが、水と山と違ひました。」
私も笑つた。

「茸だの、松露だのを些とばかり取りたいのです

が、霜しもこしなんぞは、何どの邊へんにあるでせう。御存ごぞんじ
はありませんか。」

「ほん、ほん。」と黄饅頭きまんぢうを、點頭てんとうのまゝに動うごか
して、

「茸きのこ　　ー　　松露しじゅうろ　　ー　　それなら探さがさねば爺ぢいに
かて分わからぬがいやい。おはゝ、姉ねえさんは土地とちの人ひとぢ
や。若わかいぱつちりとした目めは、爺ぢいなどより明あきかぢや。
よう探さがいて貰もらはつしやい。」

「これはお隙ひまづひえ、失禮しつれいしました。」

「いや、何なんの嵩高かさたかな．．．．」

「御免ごめん。」

「静しづかにござれい。　　ー　　よう遊あそべ。」

「何どうかしたか、　　ー　　姉ねえさん、何どうした。」

「あゝ、可恐こはい。．．．．勿體もつたいないやうで、あ
りがたいやうで、あゝ、可恐こはうございましたわ。」

「　　ー　　いまのは、山やまのお稻荷いなりさま様か、瀉かたの龍神りうちんさま様でおい
でなさいませう。風かぜのない、うらゝかな、こんな時とき
にはな、よく此この邊へんをおあるきなさいますさうです
から。」

いま畚びくを引ひ上きげた、水みづの音おとはまだ響ひびくのに、翁おきなは、
太郎たらうむし蟲むし、米こめ搗つき蟲むしの露もやのあなたに、影かげに成なつて、のび
あがると、日ひ南なたの背せも、もう見みえぬ。

「しかし、様やう子すは、霜しもこしの黄き茸だけが化ばけて出でたや
うだつたぜ。」

「あれ、もつたいない。……旦那だんなさん、あ
なた……」

「わ、何ぢやい、これは。」

「霜こし、黄い茸。……あは、こんなばゞ

蕈を、何の事ぢやい。」

「何が松露や。ほれ、こりや、破ると、中が眞黒

けで、うじや／＼と蛆のやうな筋のある（狐の糞

丸）ぢやがいの。」

「旦那、眉毛に唾なとつけつしやれい。」

「えらう、女狐に魅まれたなあ。」「これ、此

の合羽占地茸はな、野郎の鼻毛が伸びたのぢやぞい

な。」

戻道。橋で、ぐるりと私たちを取巻いたのは、あ

まのじやくを訛つたか、「じゃあま。」と言ひ、

「おんじや。」と稱へ、「阿婆。」と呼ば

る、濱方屈竟の阿婆摺媽媽。町を一なめにする魚

賣の阿媽徒で。朝商賣の歸りがけ、荷も天秤棒も、

腰とゝもに大膝に振つて來た三人づれが、蘆の横川

にかゝつたその橋で、私の提げた杖に集つて、口々

に喚いて噓した。その或ものは霜こしを指でつゝい

た。或ものは松露をへし破つて、チエツと言つて水

に棄てた。

「ほれ、眞個の霜こしを見さつしやい。此ぢやがいの。」

と尻とゝもに天秤棒を引傾げて、私の目の前に揺り出した。成程違ふ。

「松露とは、一寸、こんなものぢや。」

と上荷の箆を、一人が敲いて、

「ぼんとして、ふんと、それ、香しかる。」

成程違ふ。

「私が方には、ほりたての芋が残つた。旦那が見たら蛸ぢやるね。」

「背中を一つ、ぶん撲つて進じようか。」

「ばゞ茸持つて、おゝ穢や。」

「それを食べたなら、肥料桶が、早桶に成つて即死ぢやその、ペツペツペツ。」

私は茫然とした。

浪路は、と見ると、悄然と身をすばめて首垂るゝ。

あゝ、きみたち、阿媽、しばらく！

如何にも、唯今申さるゝ通り、較べては、玉と石で、まるで違ふ。が、似て非なるにせよ、毒にせよ。此をさへ手に狩るまでの、こゝに連れだつ、此の優しい女の心づかひを知つてるか。

――あれから菜畑を縫ひながら、更に松山の松の中へ入つたが、山に山を重ね、砂に砂、窪地の谷を渡つても、餘りきれいで……たま／＼落ちこぼれた松葉のほかには、散敷いた木の葉もなかつた。

此の浪路が、氣をつかひ、心を盡した事は言ふまでもなからう。

阿媽、此を知つてるか。

忽ち、口紅のこぼれたやうに、小さな紅茸を、私が見つけて、それさへ嬉しくつて取らうとするのを、遮つて留めながら、浪路が松の根に氣も萎えた、袖褌について坐つた時、あせつた頬は汗ばんで、その頸脚のみ、たゞさしのべて、討たるゝやうに白かつた。

阿媽、其を知つてるか。

薄色の桃色の、その一つの紅茸を、燈の如く膝の
前に据ゑながら、袖を合せて合掌して、「小松山
さん、山の神さん、何うぞ茸を頂戴な。下さいな。」
と、やさしく、あどけない聲で言った。

「小松山さん、山の神さん、

何うぞ、茸を頂戴な。

下さいな。——」

眞の心は、其のまゝに唄である。

私もつり込まれて、低聲で唄った。

「あゝ、ありました。」

「おゝ、あつた。あつた。」

ふと見つけたのは、唯一本、スツと生えた、侏儒
が涎蛇目傘を半びらきにしたやうな、洒落ものゝ茸
であつた。

「旦那さん、早く、あなた、こゝへ、こゝへ。」

「や、先刻見た、かつばだね。かつば占地

茸……」

「一つですから、一本占地茸とも言ひますの。」

先づ、枯松葉を箆に敷いて、根をソツと抜いて据
ゑたのである。

續いて、霜こしの黄茸を見つけた。――その時
の勸喜を思へ。――真打だ。本望だ。

「山の神さんが下さいました。」

浪路はふたゝび手を合した。

「嬉しく頂戴をいたします。」

私も山に一禮した。

さて一つ見つかると、あとは女郎花の枝ながらに、
根をつらねて黄色に數く、泡のやうなの、針のさき
ほどのも交つた。松の小枝を拾つて掘つた。尖はと
がらないでも、砂地だからよく抜ける。

「松露よ、松露よ、――旦那さん。」

「素晴らしいぞ。」

むくりと砂を吹く、飯鮓の乾びた天窓ほどなのを
掻くと、砂を被つて、ふら／＼と足のやうなものが
ついて取れる。頭をたゝいて、

「飯鮓より、これは、海月に似て居る、山の海月
だね。」

「ほんになあ。」

じゃあま、あばあ、阿媽が、いま、
(狐の峯丸)

ぞと呷つたのはそれである。

が、待て　　―　　葷狩、松露取は鬨の興に入つた。

浪路は、あちこち枝を潜つた。松を飛んだ、白鷺の首か、脛も見え、山鳥の翼の袖も舞つた。小鳥のやうに聲を立てた。

砂山の波が重り重つて、餘りに二人のほかに入がない。　　―　　私はなぜかゾツとした。あの、翼、あの、帯が、ふと慍る時、色鳥とあやまられて、鐵砲で撃たれはしまいか。　　―　　今朝も潜水夫の如きしたゝかな扮装して、宿を出た銃獵家を四五人も見たものを。

遠くに、黒い島の浮いたやうに、脱ぎすてた外奔を、葉起に、枝越に透して見つけて、「浪路さん　　―　　姉さん　　―　　唯、昔の戀に、聲がくもつた。　　―　　姿を見失つたその人を、呼んで、

やがて、莞爾した顔を見た時は、戀人にめぐり逢つた。世にも嬉しさを知つたのである。

阿婆、これを知つてるか。

無理に外套に掛けさせて、私も憩つた。

着崩れた二子織の胸は、血を包んで、羽二重よりも滑である。

湖の色は、あを空と、松山の翠の中に朗に泌通つた。

故のやうに、就中遙に離れた汀について行く船は、二艘、前後に帆を掛けて、辻つたが、其の帆は、紫に見え、紅く見えて、そして浪路の襟に映り、肌を染めた。渡鳥がチと囀つた。

「あれ、小松山の神さんが。」

や、や、如何に阿媽たち、――此の趣を知つ

てるか。――

「旦那、眉毛を濡らさんかねえ。」

「此の狐。」

と一人が、浪路の帯を突きざまに行き抜けると、

「濱でも何人抜かれたやら。」 一人がつづい

て頭で掬つた。

「また出て、魅しくさるづらえ。」

「眞晝間だけでも遠慮せいでや。」

「女の狐の癖にして、鞆丸をつかませたは可笑な

や、あはゝゝゝゝ。」

「そこが化けたのや。」

「おゝ、可恐やの。」

「やあ、旦那、松露など、黄茸など、眞個ものを

賣つてやるかね。」

「たかい錢で買はつせえ。」

行過ぎたのが、菜畑越に、纏れるやうに、一齊に

顔を重ねて振返つた。三面六臂の夜叉に似て、中に

はおはぐるの口を張つたのがある。手足を振つて、

眞黒に喚いて行く。

消入りさうなを、背を抱いて引留めないばかりに、

ひしと寄つた。我が肩するゝ婦の髪に、櫛もさゝな

い前髪に、上手がさして飾つたやうに、松葉が一葉、

青々と然も婀娜に斜にさゝつて、（前こぞう）
とか言ふ簪の風情そのまゝなのを、不思議に見た。
茸を狩るうち、松山の松がこぼれて、奇蹟の如く、
おのづから挿さつたのである。

「あゝ、嬉しい事がある。姉さん、茸が違つても
何でも構はない。今日中のいゝものが手に入つたよ

――顔を
顔をお見せ。」

袖でかくすを、

「いや、前髪をよくお見せ。――一寸手を
觸つて、當てゝ御覽、大したものだ。」

「えゝ。」

ソツと抜くと、掌に軽くのる。私の名に、もし
松があらば、げに其のまゝの刺青である。

「素晴らしい簪ぢやあないか。前髪にさゝつて、
その、容子のいゝ事と言つたら。」

涙が、その松葉に玉を添へて、

「旦那さん――堪忍して……あの道々、

あなたがお幼い時のお話もうかゞひます。――

眞のあなたのお頼みですのに、何うぞしてと思つても、一つだつて見つかりません．．．．嘘と知つて居て、そんな茸をあげました。餘り欲しうございましたので、私にも、私にかつて眞個の茸に見えたんですもの．．．．お恥かしい身體ですが、お言のまゝ、あの、お宿までもお供して．．．．もし其の茸をめしあがるんなら、屹とお毒味を先へして、血を吐くつもりで居りました。生命がけでだましました．．．．堪忍して下さいまし。」

「何を言ふんだ、飛んでもない。――さ、一寸、自分の手で其の松葉をさして御覽。．．．それは容子が何とも言へない、よく似合ふ。よ。頼むから。」

と、かさに掛つて、勢よくは言ひながら、胸が迫つて聲が途切れた。

「後生だから。」

「はい、．．．．あの、かうでございますか。」
「上手だ。自分でも髪を結へるね。あゝ、よく似合ふ。さあ、見て御覽。何だ、袖に映したつて、映

るものかね。此處は引汐か、水が動く。――此方が可い。あの松影の澄んだ處が。」

「あゝ、御免なさい。堪忍して……映すと

狐になりますから。」

「私が請合ふ、大丈夫だ。」

「まあ。」

「ね、そのまゝの細い翡翠ぢやあないか。琅の珠だよ。――小松山の神さんか、龍神が、姉さんへのたまものなんだよ。」

こゝにも飛交ふ蟲の翠に。――

「いや、松葉が光る、白金に相違ない。」

「えゝ。旦那さんのお情は、翡翠です、白金で

す……でも、私がだん／＼に……あれ、口が裂けて。」

「えゝ。」

「目が釣上つて……」

「馬鹿な事を。――蕈で嘘を吐いたのが狐な

ら、松葉でだました私は狸だ。――狸

と言つて、眞白な手を取つた。

湖つゞき蘆中の静な川を、ぬしのない小船が流れ
た。

【完】